

当館企画展

地域文化が育んだ 美術館・博物館の名品展



重要文化財 染付鶴文三脚付皿 佐賀県立九州陶磁文化館

特別陳列

加賀藩の美術工芸

前田育徳会尊經閣文庫分館

秋の優品選

第2～6展示室

- コレクション展示 主な作品
- ミュージアムレポート
- 展覧会回顧
- 行事予定
- 文化財現地見学募集
- 所蔵品紹介
- 講演会記録

地域文化が育んだ美術館・博物館の名品展

主催／石川県立美術館 後援／日本博物館協会

平成23年9月11日(日)～10月23日(日)会期中無休

総点数二〇〇点の中から四点の作品を紹介します。

重文 灰釉多口瓶

長頸瓶を基本とし、肩に四個の注口を付けた珍しい器形で、猿投窯の初期灰釉陶器の代表的作品です。この多口瓶はその様式や伴出の器物からみて九世紀初め頃のもので、従って、古墳時代以来の子持須恵器の伝統をひくものと思われ、肩の注口は浄瓶の口と似ており、仏器として作られたものと考えられます。素地は須恵質ですが、肩から胴の一部にかけて緑色の灰釉が施されています。自然釉とまぎらわしく見えますが、施釉したものです。シャープな轆轤目と篋使用で、厳しく締まった姿をしています。猿投窯の灰釉陶器が、後に施釉陶器としての古瀬戸窯として発展、展開していきます。

重文 染付鷺文三脚付皿

卓越した意匠、完璧な焼成技術、鍋島としては径28センチと大ぶりな作行であり、鍋島の代表的な作品の一点です。彩色は染付けによる一色ですが、鷺を白く塗り残すことにより、もう一つの色として白を効果的に使用しています。蓮の葉のもとに鷺が三羽、それぞれの姿態で描かれて



裏面

います。このような配置のうまさは鍋島ならではのものです。鷺の背景は染付けによる瑠璃地ですが、これだけ広い面をムラなく仕上げるのは至難の技です。裏面は幅の広い蛇の目高台で、高台縁に如意頭形の三脚が付き、三脚の暈付は施釉してありますので、浮かせて焼いたと考えられます。裏面三方に木蓮ふうの折枝文を描いています。完成度の高い鍋島藩窯の作品です。

根来塗 足付鉢

堅牢な木地の上に、下地をつくって黒漆を塗り、その上に朱漆を塗った漆器は、年代・製作地を問わず根来塗と総称されます。本品は、やや深めの鉢に、三本の猫足がついたもので、口縁部に、幅広い縁がめぐらされているのが特徴です。このような鉢は、寺院においてさまざまな供物を盛る容器として利用されたものです。

芭蕉朱地経縞上衣

沖縄産の糸芭蕉の繊維を糸として用いた芭蕉布は、庶民の夏の衣料として古くから織られていましたが、大戦後の混乱や生活様式の激変、技術者の高齢化などで衰退し、今では大宜味村喜如嘉を中心に限られた地域で織られるのみです。これは芭蕉布を主体に、縞の部分に絹や木綿を用いた、十八世紀の上級士族の衣裳として首里で織られたものです。



芭蕉朱地経縞上衣
沖縄県立博物館・美術館



根来塗 足付鉢
和歌山県立博物館



重文 灰釉多口瓶
愛知県陶磁資料館

重文 伝周文 四季山水図（左隻部分）
室町15世紀

重文 荏柄天縁起繪卷（下巻 部分）
鎌倉14世紀

学芸員の眼

一六七三年に刊行された『百人一種』には、書物集メハ松平加賀守綱利（加賀藩五代藩主前田綱紀の幼名）と記されています。綱紀は十七歳から書物の収集を始めており、三十一歳の時点でその実績は世に広く知られていたことが、この記述から確認できます。綱紀の祖父、三代藩主前田利常も古筆、典籍の収集に熱心で、古典文学や仏教学について該博な知識を持っていたことが知られていますが、綱紀は体系的に収集し、実際に読み込み、また自ら監修して写本も数多く制作しています。これは財力にも言わせて収集し、その物量を誇るといような次元とは全く異なるもので、学問を自己の存在証明として、武力や財力ではなく理性によって卓越してゆこうとする姿勢がうかがえます。

「加賀藩の美術工芸」という視点から、加賀藩三代藩主前田利常と、五代藩主前田綱紀の人となり、思想を比較対照することができます。特に書跡、典籍や美術工芸品の収集方針については、三十年程前までは、利常は財力にも言わせて名品を買いあさったのに対して、綱紀は深い学識に基づいて体系的に収集したと評価されてきました。綱紀の学識は、江戸幕府五代將軍徳川綱吉の講義に列席し、中庸、大学、論語などの一節を講じて賞を与えられるなど、將軍綱吉をも感嘆させるほど深いものだったようです。

対して利常は、京都の後水尾天皇の文化政策を模範として、反幕府的姿勢を明確にした文化政策の一環で文物の収集を行いました。そのため、江戸幕府の視点からの歴史的評価は、綱紀のほうが高かったようです。そこで、石川県立美術館では

一連の展示をとおして、利常の文化政策を、幕藩体制に屈従を強いられた思いの昇華という図式で捉え直し、江戸と京都、幕府と宮廷の政治力学の中で、独自の立場を保持する卓抜した戦略であったことを確認してきました。

同時に、綱紀は叔父にあたる徳川（水戸）光圀と同じく南朝顯彰の立場をとっていたことも付記しておきます。この立場は、武力による政権奪取の否定に繋がるものでもあり、綱紀は利常以来の徳川氏への反発を静かに継承していたことがここに確認されます。個性的な文化は、しばしば様々なものの見方、考え方や置かれた立場の相違という、ある種の対立軸から生まれます。「加賀藩の美術工芸」は、まさにそのことを再認識する好機ということができるとでしょう。

特別陳列

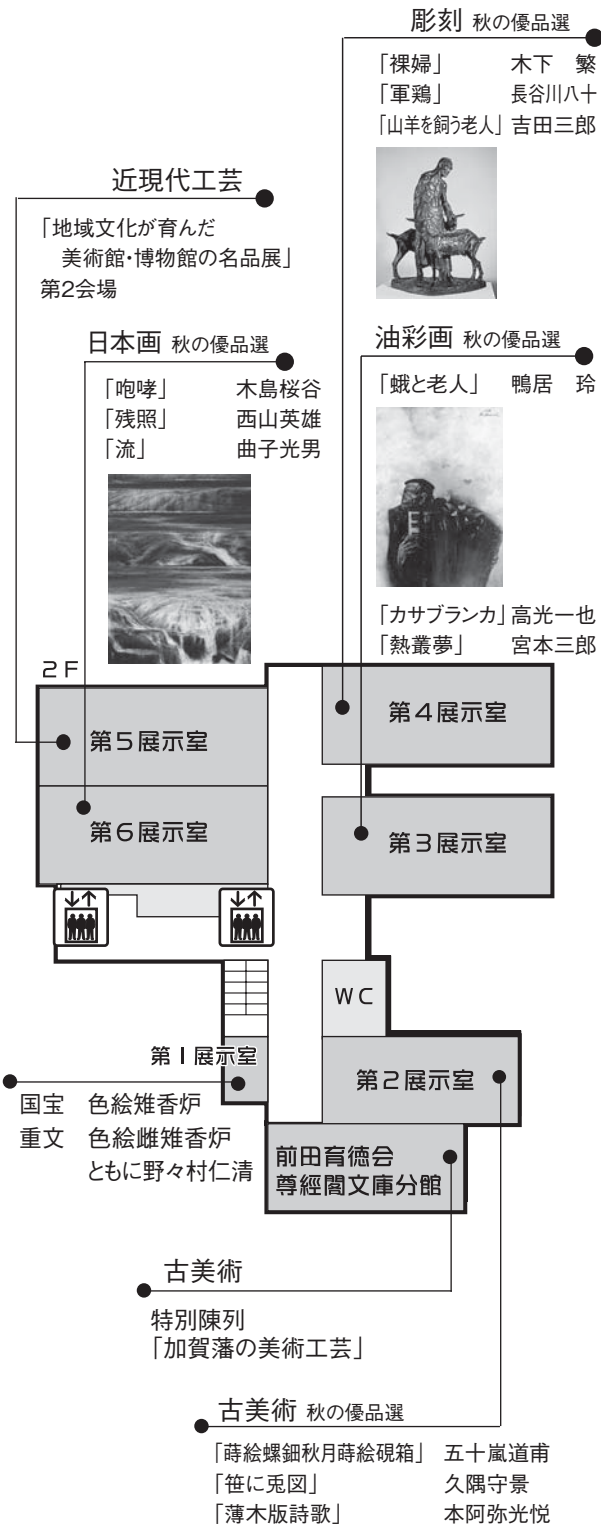
加賀藩の美術工芸

9月10日(土)～10月23日(日)会期中無休

前田育徳会
尊經閣文庫分館

主な展示作品

9月10日(土)～10月23日(日)会期中無休



秋の優品選

9月10日(土)～10月23日(日)会期中無休

前号の古美術部門に続き、近現代の絵画・彫刻部門に関し、主な展示作品を紹介します。

日本画では屏風と軸、額装を織り交ぜ、木島桜谷「咆哮」、橋本閑雪「八仙人図」といった六曲一双屏風の大作、今尾景年「古樹木兎図」、前田青邨「鮒」などの小動物を描いた佳品の軸物、額装では石川義「山里」、西山英雄「残照」、曲子光男「流」などの大作と、玉井敬泉「山の秋」など、「秋」にちなんだ作品を展示します。

油彩画では鴨居玲が「蛾と老人」「教会」「1982年私」と年代を追って三点。「蛾と老人」は昭和四十三年の作品で、鴨居が自己のスタイルを決定した時期の代表作です。「教会」は五十三年、扉も窓もない巨大な教会が宙に浮かぶシュールな

作品。金沢美大で鴨居を教えた高光一也は、ポリリューム溢れる二十七年の「裸婦」と円熟期の「カサブランカ」。宮本三郎は晩年の代表作「裸女達に捧ぐ」と「熱叢夢」。また高光と宮本については以前金沢駅のコンコースを飾っていた大壁画「森の精」と「加賀獅子舞」を特別展示します。

彫刻では明治から現代までの石川彫刻の流れをご覧いただきます。塑像、木彫、石彫、金属と技法・材質は多岐にわたり、豊かな展開に驚きます。吉田三郎「山羊を飼う老人」、松田尚之「人魚」、木下繁「裸婦」、長谷川八十「軍鶏」、高橋清「人とトラロック」などの大家の代表作と梶本良衛、清水良治、山下晴子など現在活躍中の作家の作品を網羅します。



「森の精」 高光一也



「加賀獅子舞」 宮本三郎

西山英雄と一門展

—昭和の巨星と金沢美大出身の俊英たち—

平成23年7月16日(土)～9月6日(火)

昭和の時代から巨匠と謳われた日本画家が次々と鬼籍に入る中、巨匠不在ともいわれる現代日本画壇。幾人かの巨匠が画壇を牽引した時代は終わりを告げたのでしょうか。日本画の主題も表現も多様化し、次々と「洋画」と「日本画」を越境する作家・作品が台頭してきています。さらには公募団体の枠に収まらず、個展を中心に発表を続け海外からも高い評価を得る作家も出てきています。時代は、一握りの「巨匠」により支えられた画壇から、得体の知れない未知の創造力がうごめく、アートシーンへとシフトを始めているようです。しかし、今回の展示で西山英雄という巨匠と、その弟子達の仕事をご覧になっていかがだったでしょうか。画壇という地中の深くに、師弟という根があつて初めて開く花もある。ということがいえるのではないのでしょうか。アイディアや時流にのるだけでなく、本物による触発のみが生み出し得る芸術。それは、明治以来じっくりと熟成された日本画そのものの味わいでもあります。やはり今しばらくは、巨匠たちが種を蒔いた画壇の中に、本物が生まれ続けていくことは間違いないようです。会場を訪れた皆様からは「日本画の魅力を再認識した」というお声を多数頂戴することもできました。

末尾になりましたが、本展開催に際し、西山英雄氏のご遺族をはじめ一門の皆様、関係各位にご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。



第四十二回

文化財現地見学 参加者募集

近江・いのりのかたち

—三館連携特別展「神仏います近江」を中心に—

期日／平成23年11月12日(土)

13日(日)一泊二日

日程／出発・12日午前7時30分

帰着・13日午後6時30分

発着／金沢駅西口

※移動は全て貸し切りバスを使用します。

参加代金／友の会会員23,000円、

会員以外 24,000円

今秋、「神仏います近江」のテーマのもと、信楽、瀬田、大津の三会場で、近江の宗教美術三〇〇点による大規模な展覧会が行われます。今回はこの特別展を軸に滋賀県の美術館、文化財を巡ります。

◆見学地

【滋賀県立近代美術館】

「神仏います近江」瀬田会場

「天台仏教への道

—永遠の釈迦を求めて—

【MIHOMUSEUM】

「神仏います近江」信楽会場

「祈りの国、近江の仏像

—古代から中世へ—

【大津市歴史博物館】

「神仏います近江」大津会場

「日吉の神と祭り」

【佐川美術館】

平山郁夫、佐藤忠良、楽吉左右衛門

の作品を中心に展示する美術館

【三井寺】(長等山園城寺)

国宝、重文合わせて五十二件の文化財を有する天台宗の古刹。

◆申込み方法

往復ハガキに「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・ご住所・お電話番号・会員番号を記入の上、ご応募下さい。(記載漏れの場合無効になることがあります)

※応募者多数の場合、抽選になります。

◆宛先

〒九二〇一〇九六三

金沢市出羽町二一

石川県立美術館「文化財現地見学」係

◆応募締切り

平成二十三年十月二十六日(水) 必着

「素顔の作家たち」

講師 長谷川徳七氏・長谷川智恵子氏

(日動画廊社長・副社長) 平成23年4月24日(日)



長谷川智恵子氏

長谷川徳七氏

開催中のセルフ・ポートレート展の作家の中から、日動画廊が現在まで続く最初の要となった藤田嗣治さんについて、まず話します。

藤田さんは昭和八年に日本に帰ってききました。翌九年日動画廊に現れた藤田さんに、父は個展をさせてくれませんか頼みました。当時画廊は銀座には一軒もない時で、日動画廊は銀座五丁目でも大きき結構ありましたので、藤田さんにとっても渡りに舟だったのでしよう。快く了解してくれ、それから藤田さんとの付き合いが始まりました。

私共はまだまだ駆け出しで、オープニングパーティーや、日仏、日英の招待状など、藤田さんが展覧会の開き方を全部教えてくれました。世界的に有名な画家ですから、外交官の車がずらつと店の前に並び、外交官夫人が盛装して入って来て、藤田さんが恭しく手を取ってキスをする。日本では絶対に見られない場面を目の当たりにして大変な評判になりました。その後、終戦まで十回ほど藤田展を開きました。

藤田さんから、フランスにいた藤田さんの弟子、海老原喜之助や東郷青児の展覧会をやってくれとのこと、新進の画家達が日動画廊で展覧会を開きました。そして皆大変な大家になっていきました。そういうわけで藤田さんと日動画廊の付き合いは非常に深いものであります。

もう一人日動画廊にとって忘れてはならない画家は藤島武二先生。藤島先生は絵を

決して売らなかった。父も画商になったからには藤島先生の絵を扱いたいと、何度も伺ったのですがだめでした。ですが昭和十二、三年頃になると、中国との戦争が焦臭くなつてきます。アトリエに絵を残してはあぶないと感じて、長谷川ならばと扱わせて貰えるようになりました。先生の家の裏に引越してアトリエの絵を全部整理して、いろいろ画廊に出してもらった。藤島大ファンが、我も我もと買っていき、それで、戦火にあわず残っているんです。そうでなければ、二十年の大空襲で藤島先生の家も日動画廊も全部焼けてしまったんですから、みんな失われていた。

また藤島先生は新制作協会と深く関わった方でしたので、協会立ち上げの会合を私どもの画廊で開いたりして、猪熊源一郎や脇田和さん達との付き合いも出来たのです。(以上長谷川徳七氏)

梅原龍三郎先生は私と主人にとって、画廊に入ってから大変恩のある方でした。私達は二代目なので、ほとんどの画家が父からのお付き合い、私達の功績は何もないんです。そうした中で梅原先生と父とはある時からお付き合いが離れてしまっていました。私達が二十代で先生は七十代、先生のお孫さんと私が同じような年でした。

意を決して先生がバりに滞在されてた所に二人で伺いました。一九六〇年代、日本からは大抵五〇〇ドルくらいしか持って出られない時代で、みんな質素な生活をしてたの

ですが、梅原先生は良いホテルの広い部屋に一月くらい陣取ってらっしゃるんです。その晩レストランにお供して、先生は堂々とワインをリストから選び、この肉はなどとフランス料理の講義までしていただきました。先生から絵をいただいて帰ると、画廊の中で鼻高くとても嬉しかったことを覚えています。

先生からいろいろ学んだことの一つに「謙虚であれ」というのがあります。あれだけの巨匠で、あれだけの実績があるのに、私達が一回先生を食事にお誘いすると「次は僕が」とおっしゃって、そしてお呼びになる時は必ず時間より前に来てらっしゃるんです。迎える側の礼儀をきちんとなさる方でした。(以上長谷川智恵子氏)

最後の頃は、戦前の良い作品とか、これは傑作だなというものがあつたら持つてこいとおっしゃるんですよ。それをお持ちすると、一点が二点か三点の晩年の絵になって戻ってくるんです。それで集めた自分の作品を全部東京国立近代美術館に寄贈なさいました。(以上長谷川徳七氏)

※平成23年4月24日に、「セルフ・ポートレート展—キャンパスの中の巨匠達—」の関連企画として当館ホールで開催された講演会の内容を、当館の責任において要約したものです。二人が語られた作家藤田嗣治、藤島武二、梅原龍三郎、佐伯祐三、宮本三郎、中川一政、鴨居玲の中から三名を記載しました。

夏休み キッズ☆プログラム



夏休みに行われましたキッズ☆プログラムの様子をご紹介します。七月二十七日、二十九日、八月一日の三日間は、制作体験が行われました。一・二年生の「かくれんぼハウスをつくろう」では、木ぎれで自分の宝物などをかくせる建物を制作。一年生は、カラフルでダイナミックな建物が多く、二年生は木ぎれの並べ方で模様にしてみたりとおしゃれな建物。作風に違いがあります。三・四年生は、「かごをあもう」紙ひもでのご作りは要領を得るまで少し時間がかかりますが、同じ材料でもそれぞれの方の手にかかると様々な形に生まれかわり、そこに一工夫することですらにすてきな作品になりました。五・六年生「油絵に挑戦！」では、本格的にキャンバスに油絵の具で果物やグラスなどの絵を制作。はじめての油絵制作でも、皆さんの挑むような姿勢が作品にもあらわれていました。これら夏休みの制作講座の作品を、美術館のホームページでは是非ご覧下さい。

八月七日に行われた、「アートの森でさがしてみよう！」は夏休み企画の展示室「さがしてみよう！」の鑑賞講座。参加者には、

虫眼鏡を手を持ったこの「さがしてみよう」キャラクター、みるみるくん。のように作品をよくくみてワークシートの質問に答えてねと講座がスタート。低学年の参加者が多く親子で一緒に作品を見ていただきましたが、「子どもの方が作品をよくみてくれる！」という保護者の方の声も聞かれ、親子で鑑賞を楽しんで頂きました。

ミュージアムウィーク

十月は「兼六園周辺文化の森ミュージアムウィーク」が開催されます。今年も講演会やコンサートなど多彩なイベントが計画されていますが、その中から美術館に関係するものを紹介します。

一日は、日本語研究の第一人者である金

田一秀穂氏によるオーブニングの特別講演会。二日は当館嶋崎丞館長が「日本各地に息づく伝統工芸」と題して講演します。どちらも午後一時三十分から行います。

ミュージアムコンサートは三日にヴァイオリンとチェロによる二重奏、七日にオーケストラ・アンサンブル金沢のメンバーによる弦楽四重奏が行われます。午前十一時三十分から一階ロビーを会場としたロビーコンサートです。

八日九日は「伝統芸能鑑賞会」がホールで行われます。演目は「春の海」と「越後獅子」。この行事だけは有料となります。

歴史博物館、四高記念文化交流館、伝統産業工芸館、図書館など周辺の施設でも盛りだくさんのイベントが催されます。この季節、文化に浸る一日を過ごしてみたいかがでしょうか。

十月の行事予定

■講演会		午後一時三〇分	美術館ホール	聴講無料
二日(日)	日本各地に息づく伝統工芸		嶋崎 丞 当館館長	
■土曜講座		午後一時三〇分	美術館講義室	聴講無料
十五日	柴田是真		西田孝司 担当課長	
二十二日	伝雪舟筆「四季花鳥図屏風」を読み解く		村上尚子 学芸主任	
■映画上映		午後一時三〇分	美術館ホール	入場無料
十六日(日)	萩焼 十一代三輪休雪の鬼萩 磯井正美のわざ — 蒟醬の美			16ミリ映画 37分
	志野に生きる 鈴木藏			16ミリ映画 33分
二十三日(日)	彩なす首里の織物 — 宮平初子			16ミリ映画 40分



(第3展示室) で展示中

作者は妻や娘、孫など、ごく身近で気の置けない親しい人々をモデルとして描いてきました。なかでも二人の娘さんは、少女の頃から描き続けられ、成長の過程がうかがえるほどです。作品のバックや衣服の模様には、時に絵具をチューブから画面に直出しするなどの厚塗りを施し、こうした細部へのこだわりが、肖像画や人物画を突き抜けた作品を生んできました。

本作は娘さんをモデルとしたもので、物思いに耽る眼差しは外へ向かうのではなく、自己の内へと沈潜し、見る者を思索の世界へと誘います。そして人物を中心から外した構図、毛皮のうねるようなタッチの積み重ね、寒色を主体とする重い色調が、思索をさらに深め、どこか非日常的な円地氏独自の絵画世界を醸し出しています。

作者は大正十四年小松市に生まれました。昭和二十五年金沢美術工芸専門学校卒業。同年第六回日展初入選、三十八年・四十七年日展特選。四十一年光風会展寺内賞、四十七年同展中沢賞、平成五年同展文部大臣賞受賞。昭和五十八年北國文化賞、平成三年金沢美術工芸大学を退官し、名誉教授に就任。さらに金城大学短期大学部美術学科長として後進を指導されました。

次回の展覧会

前田育徳会尊経閣文庫分館	第2展示室
尊経閣文庫名品展 — 国宝 宝積経要品 —	石川県の名宝 — 国宝・重文・県文 —
第4展示室	第5展示室
古澤洋子・五味祥子・山下晴子 展	竹工芸 橋本仙雪 — 古典とモダンのはざまに —
企画展示室	
第58回 日本伝統工芸展金沢展	

ご利用案内

コレクション展観覧料
 一般 350円 (280円)
 大学生 280円 (220円)
 高校生以下 無料
 ※ () 内は団体料金
 毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日
 10月の開館時間
 午前9:30～午後6:00
 カフェ営業時間
 午前10:00～午後7:00

10月の休館日は
 24日(月)～26日(水)



やさしさ品質

お土産・和洋菓子・生鮮・惣菜・レストラン

地階

エムザ 食品館

“もっとお客様へ、もっと地域に”

MEITETSU
MIZA

めいてつ・エムザ

金沢・むさしがは TEL代表(076)260-1111
<http://www.meitetsumza.com/>

石川県立美術館だより
 第336号(毎月発行)
 2011年10月1日発行
 〒920-0963
 金沢市出羽町2番1号
 Tel:076(231)7580
 Fax:076(224)9550
 URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>